

「煩惱」

第 1 話

—初稿—

2022/12/16

米俵

〈人物表〉

遠藤 暁 (16) 寺の息子、高校2年

深町 透子 (16) 暁のクラスメイト

遠藤 シゲオ (89) 暁の祖父

〈ログライン〉

寺の息子暁は、クリスマスに振られた透子と遭遇し、イルミネーションを一緒に見て、透子との距離が近づく話。

一軒家の居間。和室。

遠藤暁（16）、遠藤シゲオ（89）と共に、こたつに入ってみかンを食べながら、テレビを見ている。テレビから、クリスマスのイルミネーションの中継が流れる。

暁 「なー、じいちゃん、なんで家はクリスマスやんねーの」

シゲオ 「何回も言わせんな。寺じゃからだ」

暁 「んなら、他の寺もやってないか、統計とってみようぜ」

シゲオ 「住職次第じゃ」

暁 「じゃあ、寺だからじゃねーじゃーん」

シゲオ 「うちには、花祭りがあるじゃろうが」

暁 「花祭りはサンタ来ねーもん」

シゲオ 「ジジイを困らせんな」

暁、両手を広げて後ろに倒れながら、

暁 「あー、俺、彼女が欲しい」

シゲオ 「それはサンタもくれんじやろ」

暁 「まあねえ……」

暁、ゴロゴロとする。

暁、起き上がりながら、

暁 「じいちゃんはき、ばあちゃんとどうやって結婚したの」

シゲオ 「仏様がめぐりあわせてくれたんじや」

暁 「なんだよそれー。仏様はそんなことしねーって、じいちゃん、いつも言ってるじゃん」

シゲオ 「ワシは特別じや」

暁 「仏様のひいき野郎」

シゲオ 「お前もちゃんと精進せい」

暁 「へいへい。あー、なんか肉まん食いたくなってきた」

シゲオ 「お前は、煩惱のかたまりじやな」

暁、上着を着ながら、
暁 「若い時はー、煩惱しかー、ねえのー」
暁、居間を出る。

2
コンビニ・外観(夜)

深町透子(16)、コンビニの近くで男と言い争っている様子。暗がりで見えない。

暁、男女の方を見ながら、寒そうにコンビニに入る。
× × ×

暁、コンビニ前で、男女の方を見ながら肉まんを食べ始める。

男が透子に背を向けて去っていく。

透子、コンビニの方へ歩いてくる。

コンビニに入ろうとする。顔がハッキリする。

暁 「深町？」

透子、振り返る。

暁 「なんだー。深町かよ。何してんだよ」

透子 「何してるように見えた？」

暁 「あー……。すまん」

透子 「あんたは何してんのよ」

食べていた肉まんを前に出して、

暁 「何してるように見える？」

透子 「こんな寒い中で。馬鹿じゃないの」

暁 「男女の行方が気になったもんでねー」

透子 「最低」

暁 「見えるところでやる方もどうかと思いますよー」

透子 「……」

コンビニから出てくる人の邪魔になり、透子が暁に近付く。

透子 「あんた、暇なんですよ。ちょっと付き合ってください」

暁 「クリスマスに暇ではありませーん」

透子 「コンビニ前でたむろってるようなのは暇って決まってるんですよ。来て」

透子、先に歩いていく。
暁、肉まんの残りを口に押し込み、追いかける。
暁 「なー、一緒に行ったら、何かくれんのかー？」
透子、無視して歩いていく。

3
丸の内・仲通り（夜）

華やかなイルミネーション。

カップルが沢山歩いている。

透子、暁、その中を歩いていく。

暁、きよろきよろしながら、

暁 「やっべー。こんなテレビでしか見たことなかったわ」

透子 「ちよっと。恥ずかしいんだけど。普通に歩いて」

暁 「初めてなんだから、仕方ねーだろ。まじで、すげーな。俺らもカップルに見えるのかな」

透子、無視して足を速める。

透子と暁の距離が離れていく。

暁、それに気付いて、

暁 「深町っ、ちよっと待って」

透子、足を止める。

暁、小走りで透子に追いつく。

透子 「大きな声で呼ばないでよ」

暁 「……俺の家さー、寺なんだわ。しかも、家族は、じいちゃんだけで」

透子 「別に聞いてないけど」

暁 「だから……ってわけでもないんだけど、1回もクリスマスっぽいことしたことないし、イルミネーションなんてのも見に行ったこともないわけ」

透子 「ふーん」

暁、透子の方を見て、満面の笑みで

暁 「だからさ、今さ、めっちゃテンション上がってる。サンキューな」

透子、暁の笑顔に驚きながら、

透子 「あっそ」

二人、しばらく歩く。

暁 「お前でも、喧嘩したりすんだな」

透子 「は？」

暁 「さっきの。コンビニのところ。学校でもあんな風に感情見せるよな」

透子 「相手がない」

暁 「あー……。お前って、孤高って感じだもんな」

透子 「うっさいな」

暁 「あいつとは何？ 付き合ってたの？」

透子 「そう。それで、さっき振られたの」

暁 「ロクな奴じゃねーな」

透子 「あんたに何が分かるの」

暁 「クリスマスに振るような奴はロクでもねーってこと」

透子、笑いだす。

透子 「ホント。最低だったわ」

暁 「お前、笑うと可愛いんだな」

透子 「きーもーいー」

暁 「はー？ 素直な感想だろうがよ」

透子 「暁も笑うと可愛いよ」

暁 「もう二度と言わねー」

二人、笑いながら、イルミネーションの中を歩いていく。

4
駅前・ロータリー（夜）

家路を急ぐ人たち。

二人、向かい合って話す。

透子 「今日はありがとね」

暁 「おう」

透子 「あんた除夜の鐘叩くの？」

暁 「あー。たまにな。深町も出来るよ」

透子 「えっ」

暁 「一般人も叩けんだよ。うちの寺。叩く？」
透子 「行きたい」
暁 「じゃあ、一緒に行くかー」
透子 「一緒とは言っていないけど」
暁 「ツンデレって古くね？」
透子 「デレてない」
暁 「じゃあ、また連絡する」
透子 「連絡先知らないじゃん」
暁 「だから、今から聞くんだよ」
透子 「はい、これ」

透子、ラインのQRコード画面を見せる。

暁、QRコードを読み込みながら、

暁 「なー、透子って呼んでい？」

透子 「調子乗んな」

暁 「基準わかんねー」

透子 「私の名前……知ってたんだね」

暁 「当たり前じゃん。クラスの女子の名前は、みーんな覚えてるよ」

透子 「聞かなきゃ良かったわ」

暁 「なんだよ、大事なことだろ」

透子 「分かった、分かった。じゃあね」

暁 「おう、じゃあな」

暁、去っていく透子の後ろ姿を見送る。

5

暁の家・外観（夜）

築90年程の古い大きな家。

引き戸を勢いよく開ける音。

暁、シゲオの会話が聞こえてくる。

暁 「じいちゃん、俺にもサンタ来たかもしんない。

あつ、仏様かな」

シゲオ 「意味分かんねーこと言ってねーで、はよ風呂入
れ」

（続く）